

ユネスコスクール実践事例

千歳市立緑小学校

校長 武田 淳

担当 松本 広徳

1 趣旨・本校のESDの特徴

本校校区には千歳川が流れ、グラウンドに時折キツネやシカが見られるなど、住宅街でありながら自然も存在している。また、学校の近隣に大きな公園を持つなど、自然についてのESDを学ぶのに適した場所もある。これらを活用し、環境と自分たちの生活のかかわりについて理解を深めさせる。自然にかかわる体験を通して自然環境・生態系保全の心を育成する。

2 活動・全体計画

持続発展教育の視点	
◇ユネスコスクールとして地域に根ざした持続発展教育の充実を図る。環境教育は、持続発展教育に包含されるものである。	
◎取り組む教育内容	
○環境教育 ○エネルギー教育 ○人権教育 ○アイヌ文化学習 ○福祉学習 ○平和学習	
◎育てたい力	
○持続可能な発展に関する価値観（人間の尊重、多様性の重視、非排他性、機会均等、環境の尊重等）	
○自分で考える力	
○他者と協力して物事を進める力 ○自ら実践する力 ○情報収集分析能力 ○コミュニケーション能力	

持続発展教育及び環境教育 学年目標		
低学年	中学年	高学年
○身近な自然や環境に親しみ、栽培や飼育などの活動を通して、身の回りの自然環境に関心をもつことができる。 ○植物や身の回りのものを大切にすることができる。 ○様々な考えや文化があることに気づき、認めることができる。 ○身の回りには、様々な人がいて、互いに認め合い生活することができる。	○身近な自然や環境に触れ、資源やゴミなどについての問題に気づき、環境保全について考えることができる。 ○動植物の栽培、飼育に責任をもって行い資源を大切にすることができる。 ○文化の多様性に気づき、それぞれの価値について考えることができる。 ○様々な人がいることを理解し、互いに尊重することができる。	○動植物の生命を尊重し、進んで栽培や飼育などの活動をすることができる。 ○地球問題の改善について考えることができる。 ○学校や地域のよりよい環境づくりに進んで取り組むことができる。 ○文化の具体的な事象を通して、それぞれの価値について考え、尊重することができる。 ○様々な人と積極的に関わることを通して、人間尊重の精神について考えることができる。

持続発展教育及び環境教育と関わる主な事項					
[学級活動] ・カヌー学習 ・異学年交流活動 ・鮭の稚魚飼育・放流	[児童会活動] ・リサイクル活動（エコキャップ・リングブル） ・書き損じ葉書（世界寺子屋運動） ・省エネの取り組み ・牛乳パックリサイクル	[学校行事] ・ボランティア活動 ・人権教室 ・平和集会	[道徳] ○道徳的価値の深化 ・自然愛、動植物への愛情 ・生命尊重 ・節度・節制 ・公徳心、規則の尊重 ・郷土愛	[総合的な学習の時間] ・アイヌ文化学習 ・青葉公園の植物についての学習 ・千歳川についての学習 ・栽培活動 ・日本の伝統文化についての学習 ・福祉学習	[各教科] ・生活科において身の回りの環境・アイヌ文化に触れる活動 ・社会科における循環・共生・有限性・保全についての学習 ・理科における循環・共生・多様性・有限性・保全・生命尊重についての学習 ・社会・理科における地球規模の問題についての学習 ・家庭科における循環・共生・有限性・保全についての学習

※ESDとは 地球規模で起こっている環境、貧困、人権、平和、開発といった現代社会の様々な課題を自らの課題としてとらえ、身近なところから取り組むことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことをめざす学習や活動です。つまり、持続可能な社会づくりの担い手ははぐくむ教育です。

3 活動事例

- ①カヌー学習：3年生以上が行う。パラリンピックカヌー日本代表監督の鳥畑氏（校区に在住）をお招きして、毎年行っている。「カヌー学習」という名称でカヌーにも乗るが、目的は「自然の怖さ、水の力を知り、準備をして付き合うこと」を体験することである。



右側の写真は、ライフジャケット着用の上で、川に流されたことを想定し、それをロープで救助する練習である。

この学習は本来、千歳川で行うもので、学習に適したエリアが川に存在する。適した

といっても、子どもだと足が付かない場所もあるほどの深さである。気温・水温や水量の関係で、児童対象にはここ3年間実施できていないが、来年こそは実施したい。一方、職員への研修も事前にあり、こちらは毎年、多少寒くても川で行っている。体験してみると、川への「畏敬の念」を感じるようになる。

- ②アイヌ文化学習：本校の総合的な学習の中心になっている。アイヌの遊びから始まり、サケに対するアイヌの人々の思いや知恵を学ぶ。他の生き物の命をいただくことの意味について考えられる児童を育てて行きたい。



左の写真は「マレク漁」というアイヌの漁法で捕ったサケである。このあと解体し、「チェプオハウ」という汁物の料理にして食べるまでの一連の流れが学習となる。

学習を通して、アイヌの、物や命を大切にしない思想が随所に見える。そしてそれは、自然や地球を壊さず、人間もその一部となって生きながらえていく、E S Dの一つの答えである。児童には、そのすばらしさに気づいてもらいたい。

4 成果と課題

学習を通して、未来を生きる子どもたち自身に、自然環境の中で生活していることや生物多様性について、関心や理解が深まっているととらえている。写真や映像ではわからない、ダイナミックな体験ができてるのは、地域にそのような環境があり、機会を与えてくださるおかげで、とてもありがたいことだと思う。

一方、環境保全のため自分たちでできることを考え実行するなど、持続可能な社会を作ろうとする態度の育成については、リサイクルの活動などを行っているものの、本校の学習においては実施が少なく、今後の課題となる。

また、国際理解等の実践など、幅を広げることも今後の課題ではあるが、自然や生命への敬意、そしてアイヌの考えを基に思考できる児童が育てばE S Dにつながるのではないかと考えている。